第１回公開研究会　「いじめ　―教室の病い―」をめぐって

話題提供者　センター客員教授（日本女子大学人間社会学部教授）　清　永　賢　二

1998．5．22

私は，いじめというのは，過去の歴史が蓄積された上で生じてくると考えるので，時間軸とある種の現象軸，の組み合わせで現在の問題状況を見る必要があると思う。いじめの歴史を見てみると，「いじめ」という言葉が，極めて政治的，行政的なニーズの中で使われて来た部分はあると思う。もちろん，実態としてのいじめの部分もある。

昭和56年頃に，さまざまな「境界期」にある子どもの病，非行の一部もそうだが，性・薬・いじめなど非行性のある問題で，明確に「非行だ」と大人が断定する自信のない子ども問題が「境界域」のテーマとして取り上げられ始めた。この中には，先に述べた政治的，行政的なニーズが潜り込んでいたのは確かだと思う。

最近，少年非行の数は減少あるいは横ばいから上昇気味であるのに対し，いじめは深刻化し極めて問題化していると議論されている。私自身は，基本的にはいじめはたいしたことではないと考えている。しかしながら，ある種の子どもの世界の歪みがいじめという形で出てきていることは事実である。この子ども世界の深部に在る歪みの意味と重大性は，今後，深刻に考えるべきだと思っている。

例えば，少年非行には，多発の３つの山がある。

今日に続く山は，戦後第２の昭和38年の山で，この山は，それまでの非行現象の集大成のようなもので，「生存の論理」の時代の象徴的山であった。それまで，少年たちは，飢えや明日の寒さをしのぐために，非行に走っていた。

それに対して，昭和40年代の高度経済成長の時代に入った頃から，少年非行の時代も変わった。特徴づけて言うなら，この時代は「反抗の論理」の時代であると思う。何とも言えない乱れている意識，豊かではあるが本当に豊かなのか，というような時代であった。

そして今，現在。状況は，もうひとつの山を越え「反抗の論理」の時代とは明らかに異なってきていると思われる。

昭和42年頃に暴走族，昭和64年頃に校内暴力の時代に入り，その後はさらに大人の力が及びにくい子どもの人間関係の中に，より非可視的な方向に問題が進んでいった。そうした子ども問題の一つが，いじめであった，と言える。

原則的なことを言えば，そもそも人間とはそんなに繊細なものではないのだから，いじめは起こらざるを得ない。しかし，起こってはならないいじめ，許してはならないいじめがある。文部省は，しかし，この区別をせずに，ともかく「全てのいじめを起こさせるな，全員で仲良くしろ。学級や学校からいじめをなくせ。」ということで詰めていった。その結果，いじめは少なくなったかは知らないが，少年世界の全体が息苦しくなってしまったのではないか。

良く分からないが，平成４年頃から，子どもが変わったように思う。ともかく平成４年以降は，反抗の論理では現象を切れなくなってきていることは事実だ。

例えば，平成４年までは，集団関係の中での，集団の歪みとして問題を読み取ることができた。しかし，その後はそれでは読み取れない，21世紀型の子どもが生まれてきたと診断する。明らかに，集団による反抗の論理から，別の論理にスライドしてきている。この変化を私たちは，まだ，十分に読み切れていないし，時代が変わったのだ，という意識さえも持ち得ていないのではないだろうか。神戸の事件の主役，栃木のナイフ事件の子どもは，この21世紀に現われるであろう新しいタイプの少年の心の歪みを予兆している。

現象的には，暴走族など，集団の歪みとして始まって反抗の論理下で蠢いてきた子ども問題が，平成４年ごろから変化し，一人一人の「心の荒れの論理」のようなものに変わってきたと考えられる。例えば，本当の意味での自己感覚，もしくはセルフコントロールがない，核となる自分を持って何かを抑えていくということができる子どもがいなくなってきた，という気がする。自己感覚のない者は，当然他者感覚がない。社会的な自己の喪失も急速に進んでいる。

また，子どもたちの間から，人が生活を営む上で最低必要な共通の「規範」が失われているのではないか。規範とは，モノサシ，例えば「いじめをしてはいけない」

というプラスの規範がある一方で,「いじめても良いではないか」というのはマイナスの「反規範」と表現される。と同時に,私たちはなかなか気が付かないのだが,「規範」「反規範」の2つではなく，プラスマイナスの中間のゼロの状態，つまり規範そのものが抜け落ちて「ない」という状態がある。友達を殴っていいかどうか，千円ぐらいのものを盗んでいいかどうか，が分からないという状態。反規範に走っている，というならまだいいが，子ども達の精神世界の深いところで，規範が壊れた，規範そのものが抜け落ちてない，という状態は，極めて問題だといえる。

例えば，栃木のナイフ事件が起こった1ヶ月後に全国で行った中学生対象の調査の結果，栃木の子どもがやったことがわかる／わからない，自分はやる／やらない，という質問項目に，8％は「わかるし，自分はやる」，20％が「わからないけど，やる」という答えを得た。その結果には，性差・地域差がない。

こうした最近のいくつかの結果を踏まえ，まだ分からない部分が多いことも事実だが，彼らの間から自己感覚，他者感覚，規範意識がないという子ども達が増加していると思う。こうした増加の原因は，いくつか考えられるが，「これ」というものはなく，今後の課題である。

このセンターでは，「少年の規範意識の変化」に関する基本的研究，「逸脱」研究に取り組んでゆく必要があると思う。こうしたベースになるデータを得た上で，それぞれの現象に応じた対策論，プログラムの作成を個別対応的に，分野別に踏まえて行っていけば良いと思う。こうした研究無しでは，子どもの問題が先行して，大人が後から理屈をつけていく，という状態に陥っていくと思う。

〔討論〕

亀　口：平成4年に子どもが変化したというが，「子ども」といった場合に，何歳ぐらいの子どもを想定して使われているのか。また，もし今後，非行多発第4の山が来たと想定する時，その時の子どもは，どういった子どもか。

清　永：第1の質問について，少年年齢は各種の法によってさまざまな幅を持っている。少年法を基にすると，0歳から19歳までの年齢の者を「少年」と考える。私がここで主に使うのは，さまざまな調査の対象となった6歳から16歳位，そのぐらいをイメージしている。

次に第2の質問については，単純にこれまでの非行第1，第2そして第3の山のスパンを計り，その延長線上に非行第4の山を求めて見ると，およそ2004年から2010年位が危ないのかな，ということになる。

この非行第4の山の危険時点から，今度は逆算してみる。非行第4の山の主役となる少年年齢を16歳と仮説的に初期設定しておく。そうすると,逆算してゆくと,平成4年時に6歳であった者を中心に，この第4の山の主役が誕生しているのではないか，という計算が成り立つ。

平成4年に6歳であった子どもを産んだ親達は，39年頃，つまり高度経済成長の始まりの時に，6歳から10歳ぐらいの子ども時代を送っている。この世代はモデルを持っていない,かぎっ子世代といえる。

例えば，かまぼこをいくつも並べたような団地の個室の中で何でも自由にでき，カギを掛ければその中には自分の世界が広がり，隣近所や地域社会がない，親は働きに行っている，テレビのチャンネルをひねればいくらでも仮想の世界に入ることができる，というかぎっ子文化に育った世代が親になっている。 つまり，「鍵っ子世代」の子どもが，今，親になりつつある。こうした鍵っ子世代の親は，その子ども時代に，おそらく「親とはこういうものだ」とか「子どもはこう育つものだ」とかといったモデルを持たず，また，「テレビは空想のものだ」という思考回路を形成せずにそれを現実感覚で受け止めてしまう子どもが親になって，今，非行第4の山の主役の子どもたちを育てつつあるのではないか。

考えてみると，今の子どもたちの混乱は，高度経済成長の陰の部分が，長い時間をかけ今になって子どもの世界の中に反映されていると考えられる。

それが，家族の問題になっているのはわかる。子どもに対して家庭の絆の大切な時期と家族から離れていかなくてはいけない時期があり，強弱のある子育て，子どもへの対応を考えなくてはならない。そういう子育てが失われていった時に，子育ちし，親になっていって，今，非行第4の主役を育てつつあると，大胆に考えている。

だから，今から将来にかけては，問題な子どもに直接働きかけるのも大切だが，それと同時に，それ以上に，親をどうするかが問われねばならない。

フロア：自己感覚・他者感覚・規範喪失という3つの話で，後の2つは納得がいくが，自己感覚に関しては，逆の見立てもあるのではないかと思う。高度成長期時代，70年代には，「meism」，自分中心という言葉があった。子ども達の援助交際などは，自己感覚が希薄だともいえるが，「自分だけある」という自分中心，とも考えることができる。我々旧世代と比べて，「自己のあり方が違う」ということで，自己が無くなったわけではないという見立ても可能ではないか。

清　永：まず，「自己」というのをどう定義していいか私には，まだ，わからない。自己愛障害など，これから心理学の智恵，経験なども入れていかないといけないと思っている。

核になる部分と，共通の部分があると思うが，核の部分があってはじめて，共通の部分が統制できる。今の子ども達は共通の部分が肥大している。核の部分が固定化，固着化していて，膨らんでいくことが必要ではないかと思う。

少年非行などの現場では，「もっと大人になれよ」などと良く言うが，それが「核の部分」を表現している。 大人になるということは，「本質の条件を並べることができるか」，「自己決定できるか」，「それに対して自分の責任が取れるか」という3つであると思う。 例えば援助交際など，誰にも迷惑をかけていないから良いというが，彼女達が物事を見るとき，条件あるいは思考の幅が非常に狭い。その狭い中で自己決定をし，それに対して責任とれば良いというが，それは本当の意味では責任を取ることにはなっていない。物事を見極めるために必要なのは自己をコントロールする抑制力だが，今の子どもからは「抑制」つまり自分を押さえるという感覚が非常に希薄化していると思う。

鍵っ子の問題にも関連するが，子どもに食卓の絵を書かせる心理テストがあるが，それが書けない子どもがいる。つまり，今の子どもの多くは，皆で並んでご飯を食べる，という経験を失ってきている。

例えば，食卓に皆で並ぶ，おやじが来るまで待つ，母親が起きるまで待つ，というのは非常に重要な自己抑制を学ぶ場だった。そういう光景がなくなったのが，高度経済成長期以降だと思う。そこでは，自己をおさえ抑制するということの重要性を忘れて，単にお勉強ができれば良い，としてきた。そのつけが今まわってきた，と考える。

いじめの問題も，こういった状況を背景にして，しっかり摑みながらやっていく必要がある。たとえいじめの時代が終わっても，長期的に見たら子どもの問題はなくならないと思うので，研究には，長期的なもの，短期的なもの，対処的なもの，の3つが必要だろう。

亀　口：いじめは件数としては減ると思うが，不登校は着実に増えており，無視できない数字になっている。いじめと不登校は，現われかたは違うがどのような印象をお持ちか。

清　永：わからない。ただし，行政のトップの人達も，いじめよりも不登校のほうが深刻であり，これに対しては打つ手がないという印象を持っているのではないか。

亀　口：もうすぐ文部省から敗北宣言がでるかなあと思っている。むしろ出たほうがいいとも思う。文部省だけの責任ではないわけだが，決定的に責任を担ってきたということの，ある種の宣言らしきものをどこかで出さないと，局面を変えることができない。

清　永：その通り。不登校は，非行やいじめと反対方向だが，共通項があるかと思う。

亀　口：私は根っこは共通と考える。家族の問題とすれば，高度成長期に起こっていたことが，不登校で同じように起こっている。とても共感する部分が多かった。

フロア：テレビの中で起こっていることと現実の差が区別できなくなっているのではないか。栃木のナイフの少年や食卓画の話もそうだが，現実感覚があやふやになっており，現実の生活の感覚があやふやになっているように思う。

清　永：子どもは「しらけている」という感じがある。お勉強の空間，お勉強の時間，お食事の時間，家族と付合う時間，友達と遊ぶ時間，など色々なものが脈略なく存在し，それぞれがふわふわに存在して，その中で適当に動いている。全体を通じての自分の生活，がないように思える。

この「私」とこの「私」を，多重人格的に，適当に使い分けながらうまく生きており，それによって爆発するのをとめているように見える。

状況にあわせる巧妙なモノサシはあるが，全体を通しての自分の責任，自分を統制するモノサシがない。だから，大人が「おまえがやって

いることは悪い」といえば，そうですね，となるが，そのモノサシは他の場面では用いられない。だから，今の子どもには，賞罰というのが効きにくくなっているのではないか。

フロア：外国での問題の特質と，日本での状況は同じと見ているのか。

清　永：家族や地域社会の問題というファクターはアメリカやイギリスでも同じであると思うが，色の付き具合は違うと思う。

ヨーロッパ社会においては，いじめは明らかに「人種問題」という側面が大きい。人種問題の解決には，家族に対する地域社会のバックアップが重要になってくるが，これは日本での地域社会のバックアップとは違うと思う。向こうでは経済問題などが大きな要因になってくると思う。使われる対策資源は変わらないかもしれないが，質や方向は日本とは随分違うと思う。

フロア：先生がこの本を書かれた頃のピーク時のいじめは，非常に集団的なものであるが，現在は必ずしもそうではない。そういう意味では外国とも質的に類似してきているといえる。お話を伺って，身体感覚のようなものに変化が起こってきているというように感じたが。

清　永：全くそうだと思う。いじめは，基本的には境界期に起こるものだと思う。

境界性の問題は様々考えられる。

第1には，「これがいじめかどうか」を判定する大人の規範が混乱していること。この混乱が存在していて，従来の「問題行動を規定するラベル」を貼れない部分を，大人はいじめと呼んだのではないか。そうした曖昧な部分は，益々膨らんでいるように思える。問題を全て個人レベルに還元してしまう個人化のようなものも進んでおり，ますます善悪の判断が難しくなっている。

第2の混乱は，この規範基準の混乱をうけて，いじめとよんでも，どのようなサンクション（賞罰基準）を与えていいかわからないということ。サンクションの領域の混乱。

いじめは，政策的な過程で生まれる場合が過去にあったと最初に述べたが，高度経済成長下で多様化した価値観が，いじめという言葉を支える社会的政治的な基盤となっていたとも言える。

佐　藤：実際センターの調査でやりうることは，いじめがどのように語られるかを探ることであると思う。現象というよりも，その問題の処理のされかた，語られ方に問題がある。

自己感覚の喪失に関して，今の子どもの中には，一方では同一性に強迫して，自己の内面に突入する子どもが見られ，もう一方では解体して風船状態になる子どもたちが見られ，両極分化が起こっているように思う。そのような中で，規範意識が崩れた，それでは規範意識を作ろう，ということで対処できるのかどうかと思う。

清　永：わからない。家族が規範の担い手に成り得るかどうかもわからない。 家族論，心理学などでも，子どもたちを家族の中にどのようにのせていくのか，ということを誰も考えて来なかったのではないかと思う。このセンターの大きな役割の1つは，具体的な提案をしていく，プログラムを作っていくことではないかと思う。

佐　藤：アメリカでは一日のうち，子どもは家族の3倍，4倍の時間を友達関係の中で過ごす。一方ではギャングという形であるが，一方では独自の若者文化の中で過ごしているということになっている。日本の子どもは，孤立してしまっている。日本でもそれがもう少し生まれてくると，何か規範，育ちあうようなものが出てくるように思う。

清　永：今の子どもたちが，自分達の関係の中に何かを創り出す要素をもっと我々は考えていかなくてはならないと思っている。バブル以降の日本では，一人の人間が，ふわふわと浮遊しているように見える。アメリカ型は，何かの形があって，その中で子どもたちが自由に生きている感じがする。どこかで若者は繋ぎ止められている。日本では，子どもは浮遊しているという感覚を持っていて，それに対する不安もある。だから宗教や薬のように，大きな浮遊感覚の中に自分を取り込んでいくことによって，現実の浮遊感覚をごまかしてしまったり，もしくは固い，右翼的なもので自分を繋ぎ止めようとしたりする問題が生じていると思う。

フロア：20年程教師をしているが，学校現場はどうあるべきだろうか。

清　永：学校の組織としてどうあるべきかという問題と，今目の前にある子ども達とどう向き合うべきかという問題がある。これは難しい。わからない。だからこそこの学校臨床総合教育研究センター

が必要。

〔参考文献〕

『新訂版　いじめ　教室の病い』　森田洋司・清永賢二著
（金子書房　1997）